

# 美学化と社会化による個人化

## —フーコー＝ハーバーマス論争再考—

下村 晃平

本論文は、フランスの思想家ミシェル・フーコーとドイツの社会哲学者ユルゲン・ハーバーマス、および彼らの支持者たちのあいだの論争を「主体化」概念を軸にして再考するものである。

これまで既存の先行研究はこの論争を生産的な仕方であつてこなかった。その多くがハーバーマスによるフーコー批判(遂行的矛盾や規範的混乱に関する疑義)をなぞるものになっている。そのような状況に対して、アメリカの哲学者エイミー・アレンは両者の「主体化」概念を土台にして論争を再解釈する試みを示した。しかし、アレンの図式は両者の主体化の相補性を示すものにとどまっている。つまり、フーコーの主体化(「従属化」)は、主体を形成する過程における理性の働きを軽視しており、ハーバーマスの主体化(「社会化による個人化」)は主体を形成する際に不可避の権力の行使(子どものしつけなど)を重要視していない、という指摘である。このようなアレンの指摘は真つ当なものである。しかし、フーコー＝ハーバーマス論争を再考するきっかけにはなりそうもない。なぜなら、そのようなアレンの指摘は、フーコーは主体化の否定的な面を強調し、ハーバーマスは主体化の肯定的な面を強調するという、教科書的な理解の範疇にとどまるからである。

アレンと同様に、本論文もまたフーコーとハーバーマスの主体化概念に焦点をあてる。しかし、ここではフーコーの主体化として「従属化」ではなく、「美学化」をとりあげる。その理由は、フーコーの意図を考えた場合、取り上げるべきは美学化であると考えられるからである。主に中期フーコーの権力論に対してなされたハーバーマスの批判(「なぜ権力を批判するのかフーコーの立場からは答えられない」)に対して、晩年のフーコーは「自己のテクニク」による主体化(美学化)を対置しようとした。このフーコーの主体化論は、「私」と「自己」との関係性を重視するものであり、「私」と「他者」との関係性を重視するハーバーマスの主体化論(「社会化による個人化」)とは異なるものである。フーコーの主体化のパースペクティブから、ハーバーマスの主体化論において、「自己」

との関係が軽視されていることを明らかにする。

要点をまとめると、本論文は以下のことを明らかにするものである。すなわち、(1)ハーバーマスのフーコー批判とはどのようなものであり、ハーバーマスは何を問題としたのか。(2)ハーバーマスの批判に対してフーコーはどのように応答しようとしたのか。また、フーコーからの応答はハーバーマスの理論に対してどのような意味をもつのか。以上の2点である。

本論文の構成は全6章からなる。第1章では、フーコー＝ハーバーマス論争の全体像を説明し、両者の主体化を軸に論争を再解釈したアメリカの哲学者エイミー・アレンの研究を取り上げる。ここでは、この論争が基本的に、ハーバーマス(側)の視点から構成されてきたことを明らかにする。第2章と第3章では、ハーバーマスの側から構成されてきた論争とはどのようなものであるかを概括する。そのために、第2章では、ハーバーマスが批判するフーコーの系譜学的歴史記述(権力論)について、フーコー自身が説明をおこなった1976年度のコレージュ・ド・フランス講義を取り上げる。そこでは、フーコーの方法論とはどのようなものであり、フーコーは何を問題にしていたのかを明らかにする。第3章では、そのような中期フーコーの権力論に対して、ハーバーマスが『近代の哲学的ディスクール』において、おこなった批判を取り上げる。ハーバーマスによれば、フーコーの系譜学的歴史記述(権力論)は、①意図せざる現在中心主義、②不可避の相対主義、③恣意的な党派性という3つのアポリアに陥っており、社会秩序はいかにして可能か、また個人と社会は相互にいかに関わり合うのか、といった問題を説明することができないとされる。第4章と第5章、そして第6章では、フーコーの側からこの論争を再構成する。第4章では、ハーバーマスのフーコー批判に対して、フーコーがどのように応答しようとしたのかを1980年代の著作、小論、講演から推測する。その作業から、後期のフーコーは「自己のテクニク」による「美学化」によって、権力関係に抵抗する主体を形成することを考えていたことを明らかにする。そして、第5章では、このようなフーコーの主張は、ハーバーマスの理論体系、特に「他者」とのコミュニケーション的行為に重きを置く主体化(社会化による個人化)に対して、「自己」との関係を再考するように促すものであるということを示す。第6章では、両者の行為類型と行為領域の関係から2つの主体化がどのような関係にあるのかを明らかにする。